

氏名	生井達也
学位の専攻分野の名称	博士（社会学）
学位記番号	甲社第68号（文部科学省への報告番号甲第712号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2020年2月16日
学位論文題目	ライブハウスにおける音楽を介した「新たな価値」の創造をめぐる人類学的研究 —流動空間に「生きられる場」を築くこと—
論文審査委員	（主査）教授 古川 彰 （副査）教授 三浦 耕吉郎 関根 康正（神奈川大学アジア研究センター客員研究員） 小田 亮（首都大学東京大学院人文科学研究科教授）

論文内容の要旨

生井達也氏による学位申請論文「ライブハウスにおける音楽を介した「新たな価値」の創造をめぐる人類学的研究—流動空間に「生きられる場」を築くこと」は、グローバルな資本主義的市場経済イデオロギーが支配的な現代の流動空間において、いかにして人々が生きられる場を構築しているかについて、現代社会で周辺化されている小規模ライブハウスの活動を具体的な対象にして、そこにかかわる人々の「内在」的な価値創造実践を参与的に考察したものである。序章を含めて七つの章から構成される本論文の概要は、以下のとおりである。

序章では、本論文の問題関心および目的とねらいについて論じられている。近代以降の「労働化社会」では労働＝資本の蓄積を中心とする視点から人間の為すことが価値づけられていくことで、それまで「労働」の範疇になかった情動や他者とのコミュニケーション、社会的協働といった〈共（コモン）〉を含む人々の生全体が市場の原理によって収奪されていること、それに対してネグリとハート、そしてホロウェイはどのように資本に収奪されてしまう人々の実践が、それを乗り越える可能性があると主張していることを示した。こうした先行の人類学的研究で示されたのは、人々の行為を労働へと包摂する資本主義的市場経済においても、市場原理には回収されきれない実践が遍在しているという事実が不可視化されているということであった。小田はそうした実践が「どこにでも」あるのではなく、人々の単独的な関係からなる「真正な社会」においてのみ行われるとしている。

本研究が、こうした人々の実践と場の関係をめぐる議論を実証的に探究するものであることから、アパデュライによる〈ローカリティ〉と〈近傍〉という二つの絡み合う概念を援用することによって、支配的な価値観の周辺における創発的な価値創造とそれを可能にする具体的な場の構築をコンテキスト循環的な過程として捉えようとした。

こうした理論的視角をもって、本論文では、現代社会の支配的な価値観から周辺化されているライブハウスという場とそこに関わる人々の実践を内在的に捉えなおし、彼らがどのように「生きられる場」を構築し、維持しているのかを民族誌的に描き出し考察した。

第1章では、先行研究や関係資料において示されてきた日本におけるライブハウスの変遷の中で、ライブハウスという場がどのように意味づけられていったのかを社会の変容とともに分析していった。その意味づけの変遷では、ライブハウスはその原点を1950年代以降に「日本のロック」と結び付けられることで、メジャーに対するカウンター・カルチャーの場として位置づけられ、1980年代以降にロックが音楽産業のひとつとして定着すると、ライブハウスはアマチュアにとっての「メジャーへの登竜門」という位置づけがなされた。このようにライブハウスとは、メジャーに対するある種の補完的な役割を果たすものとしてその文化的意義が付与されてきたのである。さらに、音楽機材の発達とインターネットによる流通、配信などが進展した2000年以降の音楽活動の個人による経済的独立化と脱場所化の流れの中では、主に無名のアマチュア・ミュージシャンやその客にとってライブハウスは非合理的な演奏空間とされ、中心に対して何の役目も果たせない、文化的意義を喪失した場として批判されていった。

このような意味づけは、音楽産業の変化だけでなく、その社会背景の変化によっても影響されていた。雇用の流動化を推し進めるネオリベラル経済による社会の不安定化の中でフリーターが社会的に問題視されるようになると、ライブハウスでチケット・ノルマを払いながら出演する人々は、自主的にフリーターを選び「夢」のために搾取される無知な愚か者として表象されるようになる。そこではライブハウスは、「夢」を食い物にする経営者による商業施設として描き出される。つまり、現在のライブハウスに関わる主なアクターをめぐっては、店側の人々は出演者を搾取する悪者として、出演者は無知な被害者として、客は出演者目当ての「身内」や「同業者」として描かれ、閉鎖的な関係性によって成り立っている場としてライブハウスが論じられた。それゆえに、このような一方的な見方に回収されない実態を解明することが本論文の目的に据えられた。

第2章では、実際の個々のライブハウスはどのような場になっているのかの見通しが述べられる。まず先行研究ではライブハウスを画一化させると考えられていたシステムがそれぞれのライブハウスによって柔軟な在り方をしており、それは単に店側の経営方法というだけではなく、出演者や客というほかのアクターとのかかわりの中で変容していくものとして存在していた。また出演者たちが何を目的にライブをしに来るのかという点も複雑性をもっていた。それは、先行研究で言われているような仕事、趣味、そして「夢追い」のためという明確な意識に基づかない目的も多く、そうした意味でも「上からの」意味合いとはズレをもつ。それは、ライブハウスという場が生産／消費という二元論的な価値観だけで支えられていないことを示している。多くのライブハウスで「上からの」視点からは不可視化されている実践、すなわち先行研究や批判的言説が立脚するような価値とは異なる価値をその内部において創造している潜在性があることが想定できる。

第3章から第6章では、ライブハウスに関わる人々によるシステムの変容や、ライブハウスで作られる人間関係を通じた実践をより具体的に検証するため、それを端的に示すモデルケースとしてライブハウスHOLを取り上げた。HOLは、80年代以降のライブハウス・システムを取りいれている小規模ライブハウスであり、出演者の身内やミュージシャンなどの同業者が主な客となっているが、その中でもイベントにほぼ毎回来るような〈常連〉と呼ばれる人々が20数名おり、彼らの存在によってほかのライブハウスとは違う独特な場所として特徴づけられていた。HOLではチケット・ノルマなどのシステムが柔軟性をもつことで〈常連〉と呼ばれるような継続的にそこに出演し客として見に来るミュージシャンを作り出しているということであった。そして、そのようなミュージシャンの客も、彼らが継続的に出演することで、ほかの客や出演者とも関係性が作られ同時に根付いていった。

第4章では、そのように場に根付いた〈常連〉たちがどのようにHOLという場を再生産しているのかを

検討している。〈常連〉たちにとって、HOLという場は一時的にライブをする／聴くためのただのライブハウスではなく、ライブイベントも含みこんだ場所となり、生活の中心となっていた。そこからは、ライブハウスという場の多義的なものとする人々の実践が確認できるだろう。このようなHOLに継続的に来続けることで作られた〈常連〉たちによる関係性のあり方は、音楽の趣味という共通項でゆるくつながるその場限りの流動的な共同性とは異なり、趣味を超えたもっと継続的な付き合いの上で醸成される相互理解の上に作られた共同性を有した「共同体」の在り方を示しているとも指摘できる。

しかしながら、そのような継続的な関係性は、ともすれば馴れ合いや同質化、経済的な循環の停滞を招きかねないものでもある。第5章と第6章では、そのような継続的な関係性の内閉化に対して、どのような実践が行われることで場が維持されているのかへと議論を展開し、ライブハウスにおける価値創造の深部へと考察を進めていった。

第5章では、〈常連〉たちを中心としたHOLにおける経済的实践に焦点を当て、〈常連〉と店、〈常連〉同士の間で金銭のやりとりを検討していった。その結果、HOLでは一見さんの客や出演者からのチケット代やノルマを通して一定の収益を上げ経営を安定させている一方で、〈常連〉たちが金銭を必要としない相互扶助を行うだけでなく、表現や作品への尊敬を示すための金銭の授受を行い、HOLを自分たちが楽しめる場として維持していたことがわかった。それは「市場交換に見せかけた贈与交換」とも呼べる異なる交換形式のブリコラージュな実践であった。そのような実践によって〈常連〉たちは、馴れ合いによる内閉化に抗しているのである。こうした実践は、グレーバーが「個人的コミュニズム」という概念で示したような互酬性の否定とも言い換えることが可能である。このようにHOLでは、金銭やそれを払うという行為に付与されている意味や価値を、互酬性を否定するものとして利用することで、親密な関係性にある者同士がお互いのミュージシャンとしての単独性を認め、その関係性における適度な距離を保つことが内閉化に抗する実践になっていたのだ。

第6章では、HOLをという場を支える主なイベントである、〈常連〉たちが出演し、それを〈常連〉たちが客として見に来るブッキング・イベントに着目した。そのイベントの中で何年にもわたり継続＝反復されてきた〈常連〉のライブにおける盛り上がりの揺らぎと〈常連〉同士のライブへの評価から立ち上がる〈その場〉がどのようなものなのかを検討した。そこから明らかになったのは、〈常連〉の出演者、客、そして店長やスタッフといった店側の人々によって、反復されてきた〈常連〉のライブとそれまでの継続的な付き合いを通して作られた相互理解ないし評価を参照しながらも、新たな文脈を作り出していくような差異が相互作用的に作られているということであった。そのような差異によって、HOLという場が活性化され再生産されることが可能になっているのである。そのような差異の生成の基盤となっていたのが〈ちゃんと〉という彼らの語りであった。それは、それぞれのアクターがお互いの立場において〈ちゃんと〉ブッキングする、〈ちゃんと〉演奏する、〈ちゃんと〉観る（聴く）という実践を指していた。このような〈ちゃんと〉は、システムから押し付けられた規範ではなく、〈常連〉らが自発的・主体的に場に参与し、お互いの単独性を示すためのハビトゥスとして身体化したモラルティと換言できるだろう。そうしたモラルティは、第5章における金銭のやり取りにも見出せる。また第6章においては、店長の存在の重要さが改めて浮き彫りになった。それは、店長が、演奏者、客、スタッフという三つの役割を持ち、〈常連〉たちに対して権威的でありながらも水平的という包括的な存在であり、彼の実践が〈ちゃんと〉というモラルティを醸成させるある種の見本となっていることであった。また同時に、店長が〈常連〉をはじめとするHOLの内部的な部分とメジャー系やカリスマ的ミュージシャンとのつながりを持つ両義的な存在であることが場の全体を活性化する起点となっていたのであった。

このように、これまで不可視化されていたライブハウスにおける〈近傍〉と〈ローカリティ〉の生産を端的に示す事例であるライブハウス HOL では、店長を中心とした〈常連〉たちのモラリティによって経済的にも維持されるとともに内閉化しない活性化された場として再生産されていたということが明らかにされた。

論文審査結果の要旨

生井氏が提出した博士学位申請論文「ライブハウスにおける音楽を介した「新たな価値」の創造をめぐる人類学的研究—流動空間に「生きられる場」を築くこと」は、その問題意識において、ネオリベラリズムの主導する現代社会がもたらす競争原理と自己責任の過剰な要求という抑圧の中で現代社会に生きる誰もが直面している息苦しさの問題に正面から取り組んでいる。そして、そのような息苦しさを感じながらも、多くの人々が創造的でコンヴィヴィアルな生の回復に向けての意識的無意識的な試みを展開している事実に注目する。生井氏は、本論文で、そういう試みの一つであるライブハウスという現場を対象にすることで、「生きられる場」の創造の実相に迫った。

また、ライブハウスという現代社会において周辺化された場のもつ特質とその創造性を、ミュージシャン、オーディエンス、スタッフのあいだの不可視化された重層的な関係性や実践に視座をすえることによって、きわめてリアルに描きだすことに成功しているという点において高く評価することができる。とりわけ、小規模ライブハウスに継続的に集う20人前後の〈常連〉と呼ばれる人々のもつ独特な「ハビトゥス」や「モラリティ」が、一見して、反復される平凡な日常実践のなかに創造的な価値を生み出すメカニズムを明らかにしたことは、同様な構造をもつ他の小規模集団の研究にも有効性を発揮すると思われる。

このような点で本論文の成果は、現代社会の喫緊の課題に答える一般性に開かれていることは、社会批判としての本論文の第一の成果である。

第二の成果は、参与観察に基づく厚い民族誌の創造である。都市現象の一つでもあるライブハウスの人類学的研究として、その方法とフィールドワークのやり方を開拓しながら、インテンシヴなフィールドワークを実践することで、先行研究においては外在的視点から否定的に表象されてきたライブハウスの実態を、内在的に動態的に解明し、その存在様態の積極的な価値創造のありようを解明することに成功している。この成果は、本人がミュージシャンである特性を生かして深く参与観察を行ったことによって成し遂げられた貴重な民族誌的成果である。対象フィールドは一見局所的に見えるが、そこは広くライブハウスの歴史と現況のなかに位置づけられており、そこでの深い探求が、この時代に広く共有できる普遍性に届く民族誌を作りだした。

その議論内容は、現在のライブハウスの民族誌として、一つの店の「常連」を中心とした第3章～第6章は、その店が彼らによって「生きられる場」として築かれていることをさまざまな角度から描き出すことに成功しており、その分析も高い説得力がある。とりわけ、第6章の、変わらないように見えるものの反復による差異の創造とその楽しさの記述と分析は、生井氏自身が出演者としても観客としても深く参与したことによるものであり、高く評価できる。このような民族誌は、これまで書かれたことがなかったという意味で、開拓的でオリジナリティにあふれている。

第三の成果は、先行研究への内在的な批判と民族誌記述を通して新たな社会への視座を示し得たことである。

ライブハウスは、単にメジャー音楽シーンを中心とした社会空間の周辺にあつてインディーズの内閉したたまり場なのではなく、主要な担い手になっている店長と「常連」が、その場の運営者（経営、ブッキング、

音響など)、出演者、オーディエンスとして入れ替え可能な形で組み立てられており、それぞれの立場から外部の社会規範やメジャーな音楽シーンと内部の場の規範や音楽の質を呼吸・流動させる仕掛けが組み込まれていることが解明された。さらにその呼吸・流動の中において、ブッキングのための内外ネットワークの活用、求心力を持つ店長によるチケット・ノルマ制の免除を巧みに組みこむ柔軟的な運用、物販における「常連」同志での貨幣の介在、ライブハウスの音楽演奏の俗と聖ないしは儀礼性として見て取れる反復と差異の創発的な場の創造が有する魅力と期待の醸成等などが、「常連」を産み出し活性化させる場の仕掛けとして働いて、「生きられる場」として持続してきたことが明らかにされた。このライブハウスの実践は、単なるイベント行為ではなく、一年を周期にした継続的な祝祭的なものであり、一定の閉鎖性を必要とする「共同体」的なあり方を示している。

このことによって、先行研究のライブハウス表象が、その外在的な視点で見た内閉性を否定性に価値づけたことはきわめて一面的で、批判者自身がネオリベラリズム的な価値の内部から出られていないことをむしろ暴露している。現代社会を生き延びるために必要な内閉性というものは、どのようなものであるかを、生井氏の研究は明らかにした。現実のライブハウスにおいては、様々な仕掛けを駆使して内外を繋ぐ回路を用いながら、むしろ排他性も併せ持つ「常連」というライブハウスの核を醸成しているというのが実態である。このように、本研究は、ネオリベラリズムの価値に抵抗し脱却する可能性の価値のあり方を解明したことで先行研究の一面性を乗り越え、現代におけるコンヴィヴィアルな場の創造に関する重要な基礎研究として重要な意義を持っている。

審査での批判点と今後の課題

1 ライブハウスの顔見知り集団のなかで生みだされる価値が、いかなる点において副題にも記されている「新たな価値」といえるのかについて、本論は明確に呈示しえていないと言いが難い。ネオリベラリズム的な価値とは異なるという意味で「新たな」としているとは解せるが、本論文で示されたさまざまな価値は、こうした小集団的な世界ではこれまでも一定の条件がととのえば時として実現しえたものであって、とりたてて「新しい」と形容できるのか定かではない。生みだされた価値の「新しさ」を説得的に示すためには、申請者の言う「ローカリティ」の生産にとって、これらの諸価値のもつ意義／果たす役割を明らかにしていくことがさらに求められている。また、海外の事例なども含めて、さらに事例を増やすことで、より議論の普遍性を高めることができる。

2 申請者の問題関心が、今日の全体社会を覆う生きづらさであり、それを生みだしている資本主義的なイデオロギーであるならば、それらに抗いつつ生き抜くために人びとが依拠している無数の拠点を同様に描きだしていくことが必要であろう。その点では、ライブハウス間の比較だけではなく、ライブハウスとそれ以外の場との比較をする視点が今後の研究には不可欠である。

3 ライブハウスの価値評価についての研究で最も反論をしようとした先行研究に対して、十分な事例提示もあり可能であったはずなのに、明確な反論へと言語化していない点が惜まれる。関連する先行研究の記述の精度を上げることが期待される。豊かな内容のフィールドデータの適切な分析解釈に役立つからである。

上記のように課題は多々あるものの、冒頭より縷々述べてきたように、本論文がライブハウスという困難な対象に参与観察を通して迫り、優れて重厚かつ斬新な民族誌を創造し、新たな知見を提示し得たという点で、博士論文としての水準を十分に満たしていることは言を俟たない。

以上、本審査委員会は、本学位申請論文の内容と研究活動を慎重に審査し、2020年1月22日に行われた公開の最終審査口頭試問の結果をも加味して判断し、生井達也氏は博士（社会学）の学位を授与するのにふさわしいとの結論を得たので、ここに報告する。